

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	内モンゴル現代建築の蒙古特性におけるゲルの意匠
Title(English)	
著者(和文)	通拉嘎
Author(English)	Tonglaga
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12564号, 授与年月日:2023年9月22日, 学位の種別:課程博士, 審査員:奥山 信一,安田 幸一,塚本 由晴,藤田 康仁,村田 涼
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12564号, Conferred date:2023/9/22, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	TONLAGA	
論文審査 審査員		氏名	職名	氏名	職名
	主査	奥山信一	教授	藤田康仁	准教授
	審査員	安田幸一	教授		
		塚本由晴	教授		
	村田 涼	准教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は、「内モンゴル現代建築の蒙古特性におけるゲルの意匠」と題し、以下の6章から構成されている。

第1章「序論」では、蒙古民族は13-14世紀にかけてユーラシア大陸を横断する巨大な帝国を築き上げながらも、遊牧民族の特性として定住文化が希薄であったため、蒙古独自の恒久的な建築様式は16世紀以降のチベット式寺院、漢式寺院、イスラーム式寺院など様々な様式の折衷として定着してきたこと、そうした経緯を受けて、現在の蒙古民族の主な居住地域の一つである内モンゴルでは、2001年に内モンゴル政府による民族の特徴を反映した建築指針が制定されて以降、蒙古民族の伝統文化や内モンゴル地域の風土といった様々な事柄に着目した現代建築がつくられてきたが、それらの表現方法の解釈は不問に付された状況にあることを研究の動機として、本論文の目的が、それらの建築を設計した建築家の言説に着目し、内モンゴル現代建築における民族性、地域性に関する建築家の思考の検討を通して、蒙古民族の建築的象徴と目されるゲルの重要性を指摘し、ゲルをモチーフにした現代建築に限定してその実体表現を、意匠的特徴、蒙古民族の精神文化の観点から評価することで、内モンゴル現代建築の蒙古特性の一端を捉えるものであることを示し、併せて研究の方法および概要を述べている。

第2章「建築家の設計論にみる内モンゴル現代建築の蒙古特性」では、中国の代表的な建築専門誌に掲載された内モンゴル現代建築における建築家の設計論を資料に、そこで記述されている蒙古特性として着目された対象とそれに対応する表現手法との関係を検討している。その結果、歴史的・土着的対象に着目した場合は建築の部分に、自然環境に着目した場合は全体形に表現を反映させる傾向があること、さらに土着の民家形式は草原などの自然環境へ対応し、ゲルは遊牧民族としての文化に対応することから、本論文でテーマとしている蒙古特性におけるゲルの重要性を指摘している。

第3章「ゲルの意匠的特徴」では、ゲルを歴史のおよび意匠的に研究した文献を資料に、それらの文献での成果を開陳するとともに、ゲルの意匠的特徴に関する記述内容を抽出し比較検討することで、それらを、架構や仕上げ材による基本構成、紋様や色彩による装飾表現、および集落を形成した際の集合形式という3つの側面から捉えることが妥当であることを明らかにしている。

第4章「ゲルにまつわる精神性」では、3章で対象とした文献を資料に、ゲルの意匠的特徴に対応する蒙古民族の生活文化や世界観を示す精神性に関する記述内容を、ゲルをモチーフにした現代建築における蒙古特性の表現を評価する上での重要な指標と位置付け、それらを抽出し相互に比較検討している。その結果、それらの意味内容のまとまりは、ドームに代表されるゲルの屋根形態に投影された宇宙観、天窓と放射状の屋根架構に太陽崇拜が投影されたシャーマニズム、紋様や色彩に草原や空など自然現象への畏敬が投影された自然崇拜、ゲルの集合形式に遊牧生活での制度や集団精神が投影された遊牧精神としてまとめられることを明らかにしている。

第5章「ゲルを参照した内モンゴル現代建築の意匠表現」では、第2章で対象とした資料の中から、ゲルを参照したものに着目し、第3章で見出したゲルの意匠的特徴を反映する部位をゲル部と特定した上で、資料対象とした建築の実体表現をゲルの意匠的特徴の反映の程度、建物内外における視認性、非ゲル部との位置関係などを指標に類型化し、それらについて、第4章で検討した精神性も踏まえて、ゲルを参照した現代建築の意匠表現を総合的に検討している。その結果、ゲルの意匠的特徴を内部空間にも外部形態にも表し、精神性を反映した意匠も加えたゲルの造形的な象徴表現を中心として、外部形態のみに特化した表現と、ゲル部を造形化せず、ゲルの意匠的特徴の部分のみを再解釈し抽象化した表現といった、ゲル部の象徴表現の形骸化と消失という対極的な尺度のうちに各類型を位置付けられること、および象徴としてのゲル部表現が消失している類型に精神性を標榜する傾向があることを見出し、伝統解釈における直截的な造形表現と精神性の深度との相反性を指摘している。

第6章「結論」では、以上の各章で得られた結果をまとめ、内モンゴル現代建築の蒙古特性におけるゲルの意匠について、本論で得られた知見を総括している。

これを要するに、本論文は、かつて世界帝国を築きながらも、遊牧民族ゆえに恒久的な建築文化が継承されてこなかった蒙古民族において、仮設的なゲルに注目して、民族の建築的表現を模索する建築家の活動を言説、造形そして精神性といった多角的な視点から検討したものであり、蒙古民族に限らず、遺構としての文化が存続していない地域や民族における建築的アイデンティティを構想しうる視点を提示していることから、工学上および建築学上貢献するところが大きい。よって本論文は、博士(工学)の学位論文として十分な価値があるものと認められる。